会報

昭和四十二年度大会

昭和四十二年度大会は、予定通り、十一月一日（水）・二日（木）の両日に開催した。第一日見学会は、近江路をたどり、名神高速道路をぬけてまず賤ケ岳に登った。折から絶好の秋日和にめぐまれ、山上からの眺望はまことによく、往時の歴史をしのんだ。ついで東本願寺長浜別院・金剛輪寺・永源寺をたずね、講師柴田実京大教授の懇切な解説のもとに、建築・仏像など古美術を鑑賞した。

第二日総会及び公開講演は、午後一時より京都大学楽友会館において開催した。総会は、西井克巳評議員、前川貞次郎常任理事より会務・会計報告を行なった。

公開講演は、東京大学教授下村富士夫、京都大学教授・前理事長田村実造両氏により、次の演題で行なわれた。講演の内容は、何れも近く本誌に掲載する予定である。

日本近代史の諸問題　下村富士男氏

アジアの歴史世界と唐の性格　田村　実造氏

十二月例会

十二月二日（土）午後一時より

於　京都大学文学部第一講義室

向日町丘陵の妙見山古墳と寺戸大塚古墳について（スライド使用）　**近藤　喬一氏**

昭和四十二年三月及び八月、京都大学考古学教室が行なった両古墳の発掘調査の成果について、スライドにより豊富な写真を提示しながら、説明が行なわれた。

中国東北地方の初期金属器文化の様相

——考古学的資料とくに青銅短剣を中心として——　**秋山　進午氏**

中国東北地方は、解放前、〝満州〟と呼ばれ、日本の大陸侵略の主要な舞台となっていた。その〝満州〟の考古学的な研究はもっぱら大陸と日本とのかけ橋としての要素に重点がおかれ、東北地方自体の自律的な発展をとらえようとする研究はごく僅かしか見当らない。

けれども、解放後、新中国の考古学的調査の進展にともない、初期金属器文化期の遺址・遺物が次々と発見され、とりわけ遼寧省朝陽県十二台営子の墓葬から発見された青銅短剣—遼寧式銅剣—（日本学者の〝満州式銅剣〟、朝鮮学者の〝琵琶形銅剣〟）と多鈕鏡は多くの学者の注目を集め、その報告をもとにした、朝鮮の学者による論考が幾つか見られる。

けれども、その研究は中国学者による報告を充分な検討を経ずに採用しており、その年代、文化性質等の様々の点で従がい難い部分が多い。

即ち、他地域との性急な比較を行なう前に、まず東北地方自体での編年体系を考え、それに基づく文化性質・民族問題等に確たる見通しをつけ、それをもとにして始めて、周辺地域との比較検討が充分に行ないうるものである。

本稿においては、特有の形状の剣柄を特色とする遼寧式銅剣の編年を手懸りとして、東北地方における初期金属器文化期の様相を探究し、朝鮮や日本における同時期の解明への一つの資料としたいと考える。

先ず遼寧式銅剣の編年であるが、その前に中国北方のオルドス式短剣との比較をしておく必要がある。即ち、オルドス式剣は剣身・剣柄・剣把頭の三部分が同鋳で作られているのに対し、遼寧式剣においては、三部分が別々に作られ、のち、組合わせて完成する大きな違いがあり、遼寧式剣のこの特色は、より東方の朝鮮・日本の銅剣に影響している。したがって、遼寧以東の銅

剣を研究するには、従来みられた剣身のみの検討だけでなく、剣柄・剣把頭までを綜合した検討こそが必要であり、本稿では現在入手しうる遼寧式剣の資料を綜合し、とくに剣身・剣柄・剣把頭がセットをなしたものを中心にして、検討を行なうものとする。

銅剣の各部分のうちで、編年に最も役立つのはT字形をした剣柄である。従来発見の資料を一見して、それは大きく二種類に分けられる。

盤部両端が上反し、全面に斜格雷文を飾り剣把頭を上にのせた、錦西県寺児堡剣柄を標式とするⅠ式剣柄と、盤部両端が垂れ下り、三角鱗文を盤部に、回状文等を把部につけ、剣把頭を包み込んだ、旅順官屯子〃聖周〃墓剣柄を標式とするⅡ式剣柄とがそれで、それぞれ更に幾形式かに細分される。

この剣柄は朝鮮北部では無文又は細粒文の棒状剣柄に変り、T字の横棒は有機質の物質で作られたらしく、これをⅢ式剣柄とする。

次に剣把頭は四形式に分れ、爪形で逆三角形に下すぼまりの安定の悪いⅠ式剣把頭はⅠ式剣柄に伴ない、遼寧省中・西部に分布し、Ⅱ式剣把頭は安定の良い爪形で、Ⅱ式剣柄に伴ない、遼寧省中・東部に分布する。T字形をしたⅢ式剣把頭は遼寧省では例外で、平壌付近が最も多く、東は対馬に及ぶ。十字形に凸鈕をたてたⅣ式剣把頭も朝鮮半島全域から山口県向津具にまで及ぶが、このⅢ・Ⅳ式剣把頭は共にⅢ式剣柄に伴なうものである。

剣身では、典型的な遼寧式剣の形を示すⅠ式剣はⅠ式剣柄に伴ない、やや退化形式のⅡ式剣はⅠ式Ⅱ式剣柄に伴ない、最も変形されたⅢ式剣はⅡ式剣柄と伴出する。Ⅲ式剣柄に伴なう剣はすべて細形銅剣と鉄剣で、遼寧式剣とは全く異なる。以上の遼寧式剣と細形銅剣との中間形をなすⅣ式剣があって、これは旅順から遼寧省東辺山地の間に出土する。

この銅剣の形式を内容の明らかな遺構にあてはめると、十二台営子墓からはⅠ式剣とⅠ式剣把頭の組合った銅剣が、瀋陽鄭家洼子第一地点ではⅡ式剣とⅠ式剣柄が、出ている。錦西烏金塘の剣把頭は持殊であるがⅠ式の変形と見られ、剣身もⅠ式に入れえよう。旅順官屯子〃聖周〃墓は剣柄・剣把頭ともⅡ式で、剣身はⅢ式である。後牧城駅〃楼上〃墓からはⅠ式剣把頭・Ⅱ式剣柄・Ⅱ式剣の組合わさった銅剣と、Ⅱ式剣柄に特殊な柳葉形の剣身をもった銅剣とのほか、Ⅱ式からⅢ式の剣身のみのものがあり、同じく〃崗上〃墓からはⅠ式剣身のみが六口でている。

銅剣のほか、これらの墓からは銅製の斧・錐・鑿等の生産用具、馬具（?）・飾金具・刀子等の生活用具が出土し、さらに銅製釣針・土製紡錘車などもあるほか、烏金塘三号墓からは鉄鏃先、〃楼上〃墓からは鉄手鎌といずれも鉄製農具が出土しているのは注目に価にする。これらの遺物を通じて牧畜を主とし、農耕を従とする生活の様相が窺われるが、今後これらの墓葬を営んだ人々の生活遺址の発見によらねばその全体を示すことは困難であろう。

さきに銅剣、とりわけT字形銅柄によってⅠ～Ⅲ式の形式編年を行なったが、それに絶体年代を与える資料としては、Ⅰ式剣柄の出土した烏金塘墓から銅戈が伴出し、Ⅱ式剣柄のあった〃楼上〃墓から明刀銭が出土しており、年代比定のメルクマールになる。中国及び周辺地域の遺物と比較して大まかな年代を与えると、Ⅰ式剣柄を主体とする一期は前四世紀前後に、Ⅱ式剣柄を主体とする二期は前三世紀に、Ⅲ式剣柄を

主体とする三期は前二世紀とほぼ定めることが出来よう。

この年代と古文献とから、これらの墓葬を築いた民族は、一・二期は東胡族をあてるのが無理があるまい。このほか遼寧省の東北部、西豊県西岔溝より、いわゆる触角式の剣把頭をもった特殊な文化内容の墓葬群が発見され、匈奴か烏桓かの論争がある。日本の唐津柏崎出土剣はこれと連がるもので、前二世紀末から前一世紀半ばにかけてのこの文化は様々の点で非東胡系でむしろ匈奴系となし得よう。

最近朝鮮の学者は遼東半島出土の、私のいう二期を含めて、細形銅剣への発展系列として〃古朝鮮〃に一括しようとしている。しかし、一・二期の間は銅剣の系譜はもとより、文化内容においても一連の継承関係があるが、これに対して三期は様々の点で異なっている。即ち、一・二期が牧畜を主とし農耕を従とした文化内容で、むしろオルドスと関係が求められるのに対し、三期では農耕を主とし、墓の構造、遺物の内容も一・二期とはかなり異なっている。墓葬の面ではむしろⅣ式剣を出す遺址と連がりがある。そうした遺址は旅順尹家村では一・二期と重なってあったというが、今後、松遼平原周辺の山岳部における同種遺址の調査によって三期を含めた〃古朝鮮〃文化の様相がより明らかとなるのではなかろうか。

（なお本稿は近く『考古学雑誌』に発表する予定である）。

平城宮跡保存に関する要望書

平城宮跡の保存に関し、次の通りの要望書を建設大臣・文部大臣・文化財保護委員会に対し提出した。

平城宮跡保存に関する要望書

特別史跡平城宮跡東側、東一坊大路推定地を通過することに計画された国道二十四号線バイパスは、事前の発掘調査によって、予定路線上より予期せざる重要な遺構が出土し、その結果平城宮域が従来推定されたよりさらに東に拡がっているらしいという歴史的に非常に重要な事実が明らかにされた。従って関係当局はこの新しい事実に立脚し、この際英断をもって当初の計画を変更するとともにさらに所要の調査を継続し、平城宮跡の完全な保存に万全を期せられるようとくに要望する。

昭和四十二年十一月二十一日

史学研究会
理事長　小葉田　淳

学界消息

読史会

昭和四十二年五月例会　五月十三日（土）午後一時
於　京都大学文学部

第一次山本内閣について　山本　四郎

春季大会
六月十八日（日）午前九時より
於　京都大学文学部

大嘗祭の一考察　直木孝次郎

蘇我石川麻呂大臣自殺事件について　門脇　禎二

日本書紀の用語法の一考察　横田　健一

天平改元について　岸　俊男

長徳四年戸籍断簡について　泉谷　康夫

平家物語の唱導性　五来　重

備後国山内氏における領主制の発展　村田　修三

明治初期堺及びその周辺の小学校教育　福島　雅蔵

本願寺の茶の湯――藪内家との関係――　籠谷真智子

彦龍周興と惺窩　今中　寛司

七月例会　七月八日（土）午後一時より
於　京都大学楽友会館

戊辰戦争期における草莽諸隊
――世直し一揆との関連において――